

マイフェイバリット ライフ in 美幌町



ぼちぼち農場 荒木千夏
(あらき ちなつ)

- ・昭和50年生まれ 大阪府大阪市出身
- ・2005年に脱サラし大阪から北海道へ移住し農業研修を経て2009年、美幌町で新規就農
- ・大阪時代からの友人・川野美香さんとともに・レタス・ブロッコリー・グリーンアスパラ・塩トマトなどの施設栽培を含め約8ha耕作
- ・趣味は、読書と美術館めぐりと37歳からはじめたピアノ
- ・平成27年度新規就農優良農業経営者優秀賞 受賞

いつも蝉の声も聞かなくなり、あれだけ暑かつた夏も終わったんだと思い、少し寂しい気持ちになっています。

夏は毎年忙しくしていますが、それでも夏が好きだと思えるのは農業という仕事が好きだからなんだと思います。

今年は、お盆からひたすら雨が降り外作業のときはカッパを常に着ていた。雨がもたらした被害は大きく、レタスは冠水しブロッコリーは一部流され倒された。

それでも、降り続く雨が過ぎ去ったあと、また生長をはじめている作物を見るときその生命力に驚かされる。

もう駄目だなど諦めていた自分を逆に励ましてくれる。

農業に魅力を感じる一番の理由かもしない。

疲れてくるとき、しようとばかりしてくるときに作っている作物から元気をもりこんでいる。

そのたくましい生命力」。

小学生のときに「三字熟語を授業で学び始めたころ、「遠近法」、「積極的」、「春一番」など色々あったなかで私は「農作物」という三字熟語に魅了され自由帳にこの三字熟語だけを何頁にもわたり、びっしりと書いた。

自由帳に書くだけでは物足りず、家の

● 農作物

一年目は冷夏、二年目は猛暑、三年目は雹害。就農してから毎年様々な天候の中、農業をしている。

壁、階段、箪笥、机、椅子あらゆるものに書いた。結果、母親に怒られた。

今、農家になつて農繁期には毎日、農作物を収穫しているが、小学生の頃から私は農作物に魅了されたんだと思つと不思議だ。

私の未来を小学生の私は家中に書き記していたのかもしれない。

● 大工さん

農家さんの敷地によくあるロ型ハウスなどの建築を主に手がけていて、暇があればまた農場に遊びに来てくれる大工さんがある。

もう六五歳も過ぎているけどとても元気で衰える気配がない。豪快で一見怖そうだけど私が軽口をたたくといつも大声で笑ってくれる。怖そうな顔からは想像できないうちに口笛が上手で頼まれた仕事は完璧に綺麗に仕上げる。

私はこの大工のおじさんが大好きだ。あるとき、私が春一番の大風で剥がされてしまつたマルチにスコップで土をか



その日のお昼休憩のとき、このやり取りのことわざをかり忘れてお昼ご飯を食べてしばらく、自宅のチャイムが鳴り玄関を開けるとおじさんが立っていた。

出来立て

のまだ温かい豆大福が

入った袋をぶつき棒に出し「ほりうちれ、
食べ」と言つて渡してくれた。

午前中の

ける作業をしていたとき、いつものようふりつと農場に遊びに来た。

ずっと一人で骨の折れる作業をしていた私はいつになく疲れていて、つらつら思ひ通りにいかない仕事をぼやいていた。おじさんは「まあ、ころいろある」とだけ言つて私の肩を軽く叩いて行つてしまつた。

● 主語のない会話

仕事の話をもう一人の経営者の川野さんとしているとき、ときおり主語が抜けで訳のわからない話になつてゐるときがある。

作物名を言わないまま会話が進み、最後に「?」となることがある。

主語のない会話といえば、以前父と妹のやり取りで絶妙に会話が成立していたのを聞いたことがある。

私が学生の頃、五歳離れた妹がまだ高校生だった頃。彼女は高校へは電車通学で自宅から最寄の駅までは自転車で通つていた。

私のぼやきを聞いてわざわざ豆大福を届けに来ててくれたのだ。

豆飯を食べ終えて、その豆大福を頬張ると温かい気持ちになりぼやいていた自分が恥ずかしくなつた。

「いつも誰かに支えられているんだと思う。私もおじさんみたいな優しさを誰かにあげられたらうなと思う。

学校からの帰り、いつもの道で転倒したそ�だ。

玄関先で妹と一緒にいた私はその一部始終を聞いた。

妹..「お姉ちゃん、私は自転車でけたー」

私..「大丈夫? 何で?」

妹..「自転車でたら頭にカラスがとまつてん!」

私..「えー? そんなんあるの?」

妹..「ビックリして自転車でけてカラスがそのまま“カア”」書いて飛んでいつてん!」

私..爆笑

そのまま私達は居間に行き、妹が今度は父と先ほどの話を始めたのを私は横で聞いていた。

妹..「自転車でけたー」

父..「大丈夫か? 何で?」

妹..「ぶつかってけたー」

父..「誰? 男か?」

妹..「どっちかわからん」

父..「相手は謝ってくれたん?」

妹..「カアーて言つてた」

父..「かあー?」

妹..「あれ、謝つてたんかなー」

父..「意味わからん。変わった人やね」

妹..「人じゃなくてカラスやねん」

父..絶句

この一部始終を聞いていた私は綱渡り的な会話に拍手をしたくなつた。

とにかく、主語は必要だ。

● 心に残る言葉

勤めていた頃のことじで、今でも忘れられない仕事がある。

四つのチームからなるプロジェクトで、そのうち一つのチームのリーダーに抜擢され、胃が痛くなる毎日を過ごした。

見事な空回り具合で自分の力量のなさを痛感させられた。

今でも時折当時のことを思い出しては情けなかつたと苦い思いをする。

今の自分ならもっといい仕事ができただろうかとあの頃の自分と今の自分を比べてみたりもする。

まず、心を落ち着かせる。

それから蛇口を少しひねり水を出し瓶

日の前の問題にばかり氣をとりれ、先が読めなくなつていたとき、プロジェクトを統括していた課長に言われた言葉が今でも自分の心の中にある。

「手段と目的を間違えるな」

本来の目的は何か、これは手段に過ぎないのだと。

いつしか手段が目的にすり替わり、目的が何かを見失つていた私にとても的確なアドバイスをくれた。

今の仕事をしていても何か問題にぶつかったときは、この言葉を頭の中で反芻している。

その言葉をくれた課長とは今でも帰阪したときに一緒にお酒を呑んで昔の話や今の仕事の話をする。

いつか時期をみて、この言葉が今でも私の心の中にあること、その時のお礼を言いたいと思つてゐる。

● 研ぐ

石を十分に握りせる。

包丁を持ち、刃のあたりに指を添えて、包丁と砥石との間に一〇円玉が入るぐらじの隙間を意識しながら静かに包丁を研ぎはじめる。

そして想像する。

ブロッコリー畑で、パートさん達が包丁を持ちブロッコリーの収穫をする。すると、あちこちから歓声があがる。

「なにーこの包丁…かじり切れるー」

「ほんとー私の包丁もー」

「えつー私のものー」

想像の世界から現実の世界に戻り、静かに包丁を研ぎ終え、切れ味を確認する。

「切れないじゃない…。研ぐ前と変わらないじゃなく…」つぶやく私。

包丁を研ぐのはとても難しい。何回挑戦しても上手くいかない。いよいよなつて動画再生サイトで包丁研ぎの説明動画をじっくり観る。

やり方は間違ってしなじし、何より心意気なんて人一倍ある。

研いで

いる途中

で今回は

上手くい

つたかも

しない

と確信を

持った瞬

間が何度

とあつた

が、結局結果は同じもと同じだ。

道具のメンテナンスもしっかりできないと一人前の農家さんにはなれないと思

うだ。

来年からはブロッコリー畑で歓声があがるのを聞きたいく。

● 黄色い手袋

収穫作業のときには薄手の生地の布手袋をはき、その上から薄手のビニール手袋をはく。

機械作業のときには薄手の生地の布手

袋の上からグリップがきく少し厚手の黄色い手袋をはく。



袋の上からグリップがきく少し厚手の黄色い手袋をはく。

この機械作業のときにはじている黄色い手袋に関して毎年奇妙な現象が起きる。

袋から新しい黄色い手袋を出し、使って洗濯をして繰り返しているとのうか

右手の手袋だけがなくなっている。

何故か毎年右手の手袋だけがなくなる。

左手ばかりが手袋入れのカゴに残っているので、急いでるときは、無造作にポケットに突っ込んで作業場に行き、じさ

はいたときには、右手に左手の手袋がはめられておかしなことになる。

改めて手袋入れのカゴをひっくり返して右手と左手を揃えてみると右手：左手二二：八くらいの割合になつていてカゴの前で首を傾げる」とになる。

そして毎年言つのが「でーたーなー。右手おばけ」

一体、右手の黄色い手袋はどうじつたのか。いつかともどもなことばかり右手の黄色い手袋がたくさん出しているのだろうか。